埋蔵文化財発掘調査概報

基盤整備促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

天王山西遺跡
三宅神社遺跡
梅　田　遺　跡

梅田遺跡調査区全景（北から）

２００１．３

鈴鹿市教育委員会

天王山西遺跡（２次）調査区全景（北から）

三宅神社遺跡（５次）調査区全景（東から）

例言

1．本書は三重県鈴鹿市国府町において実施した，基盤整備促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査の概要報告である。

2．調査にかかる費用は，国府南部地区土地改良区の負担による。

3．調査は，下記の体制で実施した。

・調査主体　　鈴鹿市教育委員会
・調査担当　　鈴鹿市考古博物館
埋蔵文化財係
館　　長　　林　　銀哉
係　　長　　中森　成行
指導主事　　岡田　雅幸
副 主 査　　新田　　剛
事務吏員　　伊藤　朋之（平成10・11年度）
河村みゆき（平成12年度）
嘱　　託　　杉立　正徳（平成10年度　　発掘調査担当）
林　　和範（平成11・12年度発掘調査担当）
吉田真由美（平成11年度　　発掘調査担当）
石田　浩司（平成12年度　　発掘調査担当）
室内整理員　　加城　陽子・真鈴川千津子・片岡貴美子
神田　　梢・杉本　恭子

4．調査期間中には，下記の方々に専門的なご指導とご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

伊藤　裕偉（三重県埋蔵文化財センター）　　穂積　裕昌（三重県埋蔵文化財センター）
篠原　英政（関市教育委員会）　　山澤　義貴（三重県埋蔵文化財センター）
田中　弘志（関市教育委員会）　　山中　　章（三重大学教授）
八賀　　晋（三重大学名誉教授）　　山中　敏史（奈良国立文化財研究所）
早川　万年（岐阜大学助教授）　　（敬称略・五十音順）

5．本書作成にかかる整理及び執筆分担は，主として各遺跡の現場担当者によるが，目次及び文末にその氏名を記した。編集は岡田の指導のもと，林が行った。

6．本調査に関する遺物，写真，実測図などは鈴鹿市考古博物館において保管している。

7．本書に用いた遺構表示略記号は，下記のとおりである。

SB：掘立柱建物　　SD：溝　　SE：井戸　　SH：竪穴住居　　SK：土坑

本文目次

Ⅰ．前言……【岡田雅幸】……1
Ⅱ．位置と環境……【岡田雅幸】……3
Ⅲ．天王山西遺跡（１次）……【中森成行】……5
Ⅳ．天王山西遺跡（２次）……【林　和範】……8
Ⅴ．三宅神社遺跡（５次）……【林　和範】……13
Ⅵ．梅田遺跡……【石田浩司】……20

写真目次

写真　梅田遺跡調査区全景……表紙
写真　天王山西遺跡（２次）調査区全景……巻頭
写真　三宅神社遺跡（５次）調査区全景……巻頭
写真１　現地説明会（梅田遺跡）……1
写真２　ＳＢ０１０３（北から）……6
写真３　ＳＥ０１０２（北から）……6
写真４　ＳＢ０２０１（西から）……8
写真５　ＳＢ０２０２（北から）……9
写真６　柱穴（断ち割り）……9
写真７　柱穴（断ち割り）……9
写真８　ＳＫ０２１１（北から）……10
写真９　円面硯……10
写真10　緑釉陶器……10
写真11　ＳＢ０５０１（西から）……14
写真12　ＳＢ０５０２（北から）……14
写真13　ＳＢ０５０６（北から）……14
写真14　ＳＥ０５０３（西から）……15
写真15　ＳＥ０５０３（底部横桟）……15
写真16　ＳＥ０５０３出土土器……15
写真17　ＳＥ０５０３出土曲物……15
写真18　ＳＥ０５０５（東から）……16
写真19　ＳＥ０５０６（上から）……16
写真20　ＳＥ０５０６出土斎串……16
写真21　ＳＥ０５０６出土横櫛……16
写真22　出土遺物（土師器・須恵器・灰釉陶器）17
写真23　出土遺物（墨書須恵器）……17
写真24　調査区中央部（北から）……19
写真25　調査区東側（北から）……21
写真26　ＳＢ０７（西から）……21
写真27　ＳＨ０３・０４（北から）……22
写真28　ＳＨ０１（東から）……22
写真29　ＳＫ２６（東から）……22
写真30　出土遺物（土師器）……23
写真31　出土遺物（須恵器）……23
写真32　ＳＤ０１（西から）……24
写真33　ＳＫ１０土器出土状況（西から）……25
写真34　ＳＫ１９（北東から）……25
写真35　調査区西側（北東から）……25
写真36　出土遺物（墨書山茶碗）……25
写真37　出土遺物（土師器・山茶碗）……27
写真38　出土遺物（青磁・白磁・青白磁）……27

挿図目次

図１　遺跡位置図（1:10,000）……2
図２　周辺の遺跡分布図（1:25,000）……4
図３　天王山西遺跡（1次）調査区位置図（1:2,500）……5
図４　天王山西遺跡（1次）遺構平面図（1:200）……7
図５　天王山西遺跡（2次）調査区位置図（1:2,500）……8
図６　天王山西遺跡（2次）遺構平面図（1:400）……11
図７　出土遺物実測図（1:4）……12
図８　三宅神社遺跡（5次）調査区位置図（1:2,500）……13
図９　文字押印瓦拓影（1:1）……16
図10　三宅神社遺跡（5次）遺構平面図（1:400）……18
図11　梅田遺跡調査区位置図（1:2,500）……20
図12　梅田遺跡遺構平面図（1:400）……26

表　目　次

第１表　調査遺跡一覧表……2
第２表　報告書抄録……28

Ⅰ．前言

１．調査に至る経緯

平成１０年，国府南部土地改良区は三重県鈴鹿市国府町地内において基盤整備促進事業を計画し，鈴鹿市教育委員会に埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れを行った。計画地の中には周知の埋蔵文化財包蔵地である「天王山西遺跡」「三宅神社遺跡」「梅田遺跡」が含まれることから，地下に埋蔵文化財が包蔵されていることが予想された。そこで，国府南部土地改良区と鈴鹿市教育委員会との間で協議を重ねた結果，平成１０年１０月２日～９日にかけて試掘調査を実施することになった。調査は水路及び道路予定地を中心に１０ヶ所の調査区（約２１０㎡）を設定し，実施した。調査の結果をもとに，国府南部土地改良区と鈴鹿市教育委員会が，埋蔵文化財の取り扱いについて再度協議を行った結果，遺跡の保存は困難との意見に達し，事前に発掘調査を実施し記録保存をはかることとなった。

調査主体は鈴鹿市教育委員会，調査は鈴鹿市考古博物館埋蔵文化財係が担当した。

発掘調査は平成１０年度から開始し，平成１２年度までの３カ年で３遺跡，４カ所の調査を実施した。

２．平成10年度の調査

平成１０年度は天王山西遺跡（１次）において８２４㎡の本調査を実施した。調査の概要については，第Ⅲ章の報告のとおりである。

また，公開普及事業として，２月９日に地元の国府小学校の６年生７９名を対象に遺跡説明会を行った。

３．平成11年度の調査

平成１１年度も引き続き天王山西遺跡（２次）において３，０００㎡，それに加え新たに三宅神社遺跡（５次）において２，８００㎡の本調査を実施した。調査の概要については，第Ⅳ章・Ⅴ章の報告のとおりである。

また，公開普及事業として，天王山西遺跡では８月２８日に，三宅神社遺跡では１２月２５日に一般市民を対象に現地説明会を実施し，それぞれ３２名，１２０名の参加を得た。

４．平成12年度の調査

平成１２年度は梅田遺跡において４，２７０㎡の本調査を実施した。調査の概要については，第Ⅵ章の報告のとおりである。

また，公開普及事業として，１１月２５日に現地説明会を実施し，一般市民を中心に約６０名の参加を得た。明くる２６日には国府公民館主催の「親子ふれあいフェスティバル」の一環で国府小学校・明生小学校の親子約４０名を対象に現地説明会を実施した。　（岡田　雅幸）

写真１　現地説明会（梅田遺跡）

NO	遺跡名	所　在　地	調査面積(㎡)	調　査　期　間	調査担当	備　　考
1	天王山西 遺跡(1次)	国府町 字中木曽田	８２４	平成11年１月18日 ～２月26日	杉立　正徳	２月　９日遺跡説明会 ２月１７日航空写真撮影
2	天王山西 遺跡(2次)	国府町 字中木曽田	３，０００	平成11年５月６日 ～８月31日	林　　和範 吉田真由美	８月２８日現地説明会 ８月２５日航空測量
3	三宅神社 遺跡(5次)	国府町 字中木曽田	２，８００	平成11年９月９日 ～12年１月５日	林　　和範 吉田真由美	１２月２５日現地説明会 １２月２１日航空測量
4	梅田遺跡	国府町 字梅田	４，２７０	平成12年４月17日 ～13年１月19日	石田　浩司 林　　和範	１１月２５日現地説明会 １２月２５日航空測量

第１表　調査遺跡一覧表

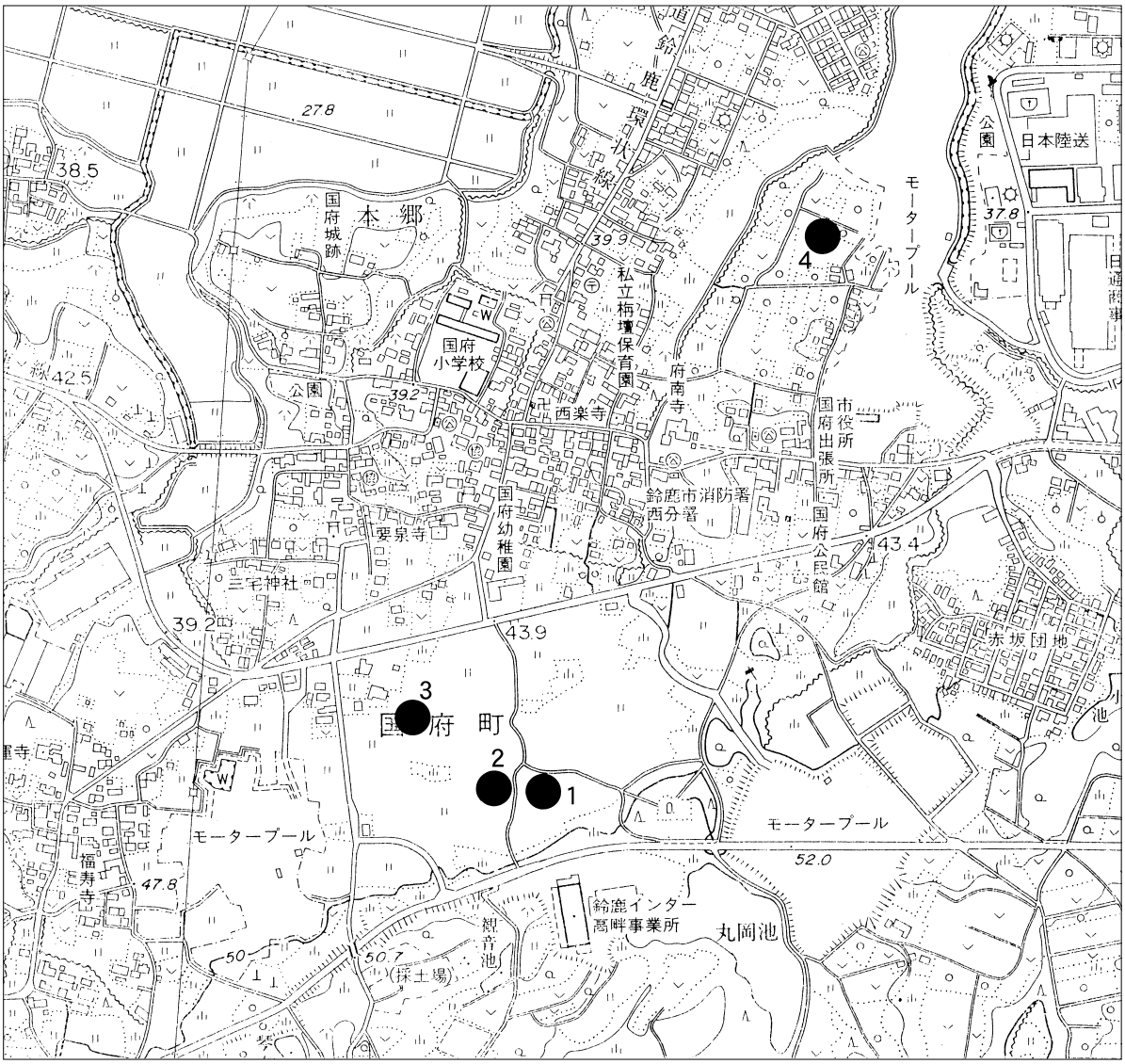


図１　遺跡位置図　（１：10,000）

Ⅱ．位置と環境

鈴鹿市は県内でも有数の遺跡の宝庫として知られ，市内には約１，３００カ所もの遺跡が所在している。中でも今回発掘調査を実施した天王山西遺跡（１）・三宅神社遺跡（２）・梅田遺跡（３）の３遺跡が所在する国府町周辺と国史跡「伊勢国分寺跡」が所在する国分町周辺には遺跡が密集しており，市内でも１・２を争う地域である。

国府町は鈴鹿市西部にあり，亀山市との市境に位置している。両市を隔てるのは鈴鹿山脈に源を発する中規模河川の鈴鹿川である。その鈴鹿川右岸の河岸段丘上に今回の調査区は所在している。

ここでは当該事業により発掘調査が行われた３遺跡を中心に国府町の遺跡を概観する。

国府町では縄文時代から人々の生活の痕跡が見られ始める。昭和４３年，工場従業員用寮建設に伴い調査された北一色遺跡（４）はその出土遺物から中期から晩期にかけての集落遺跡である。竪穴住居・土坑・溝の他に合口甕棺墓が確認されている。西ノ野遺跡（５）では石斧が出土し，石鏃・石匙が採集されている。また，平野遺跡（６）でも後期の土器片が採集されている。北一色遺跡の西側に接する保子里遺跡（７）では平成１１年に病院建設に伴う調査が行われ，後期から晩期の土器が出土し，竪穴住居も検出されている。

弥生時代にはいると平野遺跡では弥生土器が採集され，保子里遺跡では中期の方形周溝墓や竪穴住居が検出され，弥生土器が出土している。

鈴鹿川流域は三重県内でも屈指の古墳群の分布地帯である。亀山市から東流してきた鈴鹿川が市内に入ると上流から八野古墳群（８）・西ノ野古墳群（９）・保子里古墳群（１０）・八百姫古墳群（１１）・石丸野古墳群（１２）が所在する。八野古墳群は八野町北方の段丘縁辺部に位置する。もとは２５基あったが，現存するのは１６基になっている。ほとんどが直径１０～１５ｍ規模の円墳であるが，最大は１０号墳の直径３０ｍである。国府町西方に位置する西ノ野古墳群も明治期には９１基もの古墳があったといわれているがその後の開墾などで消滅し，現存するのは１１基だけである。１号墳である王塚古墳は昭和４５年に国史跡に指定されている。全長６３ｍの前方後円墳で陪塚も伴っていることからこの地域を支配した有力者の墳墓であろう。保子里古墳群も戦前には２８基あったのが開墾や工場建設に伴い１５基に減少している。１号墳は車塚または大塚古墳とも呼ばれており，直径約２０ｍ，高さ３ｍの円丘が二つ連なる全長４６ｍの双円墳である。副葬品として垂飾付耳飾（東京国立博物館蔵）や鏡・承台付銅鋺・銅鈴鉄杏葉などがあることから，かなりの有力首長の存在を物語っている。八百姫古墳群は国府町から平野町にかけて所在する８基の古墳群である。うち１・２号墳は消滅しているため現存は６基である。４号墳が八百余歳でこの地で没したという伝説の八百比丘尼を祀ってある八百姫塚である。また八百姫古墳群最大の規模を持つ８号墳は径２１ｍ，高さ５．５ｍの帆立貝式前方後円墳と考えられている。同じく平野町には石丸野古墳群が位置しているが，現存しているのは１号墳のみである。

律令期になると地名が表すように国府町に伊勢国府が置かれていたと長い間考えられていた。しかし，鈴鹿川対岸の広瀬町に所在する長者屋敷遺跡の調査によって国府跡は長者屋敷遺跡（１３）であることが判明した。そのため，現段階では長者屋敷に置かれていた前期国府が何らかの理由により廃絶した後の後期国府が国府町に所在したのではないかと考えられるようになった。

今回調査された３遺跡からも奈良時代後期から平安時代にかけての時期に企画的に配置された掘立柱建物などの遺構や緑釉・灰釉陶器や青・白磁などの高級品の遺物が確認されており，国府関連施設であったと考えられる。

【岡田　雅幸】

参考文献

『国府のあゆみ』　国府地区市制五十周年記念事業実行委員会

『鈴鹿市史』　第１巻

図２　周辺の遺跡分布図　（１：25，000）

天王山西遺跡（１）・三宅神社遺跡（２）・梅田遺跡（３）・北一色遺跡（４）・西ノ野遺跡（５）・平野遺跡（６）・保子里遺跡（７）・八野遺跡，八野古墳群（８）・西ノ野古墳群（９）・保子里古墳群（10）・八百姫古墳群（11）・石丸野遺跡，石丸野古墳群（12）・長者屋敷遺跡（13）

Ⅲ．天王山西遺跡（1次）

１．はじめに

国府町から平野町に至る鈴鹿川中流域右岸の台地は市内でも古墳や遺跡が密集している地域である。

天王山西遺跡は平安時代から室町時代にかけての遺跡である。伊勢国府の総社とされる三宅神社から南西約５００mの地点にあって，ちょうど後背から延びる丘陵（標高約６０m）の裾部に位置する。

本調査に先立つ試掘調査から，この高台を中心に東西約１２０m・南北約８０mの範囲で遺構の広がりが確認され，平成１０年度は東側部分の８２４㎡を調査した。調査は平成11年１月１８日から２月２６日まで行われた。

図３　天王山西遺跡（１次）調査区位置図（１：２,500）

２．調査の成果

調査の結果，掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが検出された。掘立柱建物は５棟検出されているが，やや南北を意識した建物配置をとり，棟方向から大きく二つの建物群に分けることができる。

掘立柱建物ＳＢ０１０１　調査区の中央で検出された３間×２間の東西棟である。建物の規模は桁行６．３m，梁行３．６m，柱間は桁行が２．１m等間，梁行が１．８m等間である。柱穴の掘方の平面形は一辺５０㎝前後の隅丸方形である。ＳＢ０１０４に切られている。柱穴の一部から土師器・須恵器・瓦などの細片が出土している。時期的には平安時代が考えられる。

掘立柱建物ＳＢ０１０２　調査区の北部で検出された３間×２間以上の建物である。東側が水田の床下げにより削平されているため残りが悪いが，南北棟と想定すると桁行５．７m，梁行３．８m以上、柱間は桁が北から１．８m・１．８m・２．１m，梁行が１．９m等間である。柱穴の掘方の平面形は径５０㎝前後の円形である。出土遺物はほとんどなく時期設定は難しいが，ＳＢ０１０１と比べると，建物の柱筋は通らないが建物の棟方向は同一であるためほぼ同時期の平安時代が考えられる。

掘立柱建物ＳＢ０１０３　調査区の西部で検出された掘立柱建物である。４間×２間の身舎の北側に庇がつく南北棟である。桁行は８m，梁行４．２m，柱間は桁行が２m等間，梁行が２．１m等間である。柱穴の掘方の平面形は基本的には一辺４０㎝前後の隅丸方形である。出土遺物はほとんどないが，時期は平安時代であろう。

写真２　ＳＢ０１０３　（北から）

掘立柱建物ＳＢ０１０４　調査区の中央でＳＢ０１０１と重複して検出された３間×２間の東西棟である。ＳＢ０１０１を切っており，ほぼ同規模・同位置で建てられているためＳＢ０１０１の建て替えであると考えられ，時期も平安時代である。建物の規模は桁行６m，梁行３．６m，柱間は桁行が２m等間，梁行が１．８m等間である。柱穴の掘方の平面形は一辺５０㎝前後の隅丸方形である。

掘立柱建物ＳＢ０１０５　建物の南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが，２間以上×２間の南北棟である。建物の規模は桁行３．６m以上，梁行４m，柱間は桁行が１．８m等間，梁行が２m等間である。柱穴の掘方の平面形は基本的には円形であるが統一性はない。遺物は全く出土しなかったが，ＳＫ０１０５に切られていることや，ＳＢ０１０３と棟方向が同じであることから平安時代であろう。

土坑ＳＫ０１０５　調査区の南部で検出された長径４m，短径２．８m，深さ３０㎝の楕円形の土坑である。ＳＫ０１０６と重複しているが，切り合い関係は不明である。出土した須恵器から，時期は平安時代と考えられる。

土坑ＳＫ０１０６　ＳＫ０１０５と重複して検出された不整形の土坑である。深さはＳＫ０１０５より浅く，２０㎝である。

井戸ＳＥ０１０２　一辺２．３mのほぼ正方形の掘方を持つ素堀りの井戸である。検出面からの深さは１mであるが，５０㎝のところで段を持ち，テラスを形成する。井戸の方位と掘立柱建物の方位が一致している。出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦などがあるがいずれも細片である。

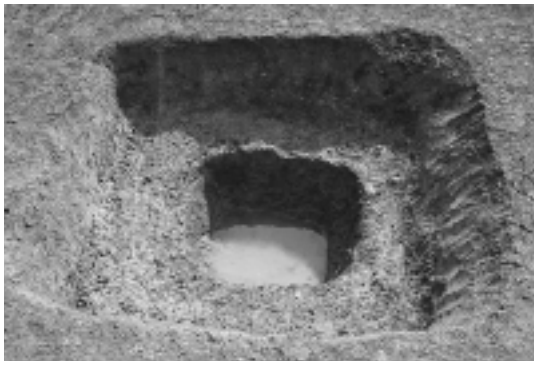


写真３　ＳＥ０１０２　（北から）

溝ＳＤ０１０１　調査区の北東部で検出された溝である。その形状から竪穴住居の可能性も残っているが，はっきりしないため現段階では溝として報告しておきたい。時期不明であるが、土師器の細片が出土している。

３．おわりに

本調査だけでは全体像ははっきりつかめないが，掘立柱建物を中心とした平安時代の集落跡であろうと推定される。出土遺物の時期も１１～１２世紀と限定されることなどから，集落の存続期間は比較的短かったように思える。

検出された建物群が伊勢国府（後期）と直接どのような関係にあったのかは明らかではないが，現段階では伊勢国府の成立期にあわせて再編成された古代集落の一つと考えておきたい。

【中森　成行】

図４　天王山西遺跡（１次）遺構平面図（１：200）

Ⅳ．天王山西遺跡（2次）

１．はじめに

天王山西遺跡は故・藤岡謙二郎氏の歴史地理学的研究によって想定された方八町の国府域の南東部に位置する。

今回の調査は平成１０年度の１次調査に引き続き，２次調査目にあたる。調査区はＡ・Ｂ２区に分かれており，１次調査の西側にＡ区約４００㎡，Ｂ区約２，６００㎡の計約３，０００㎡の調査区を設けて実施した。

調査は平成１１年５月６日から８月３１日まで行われた。

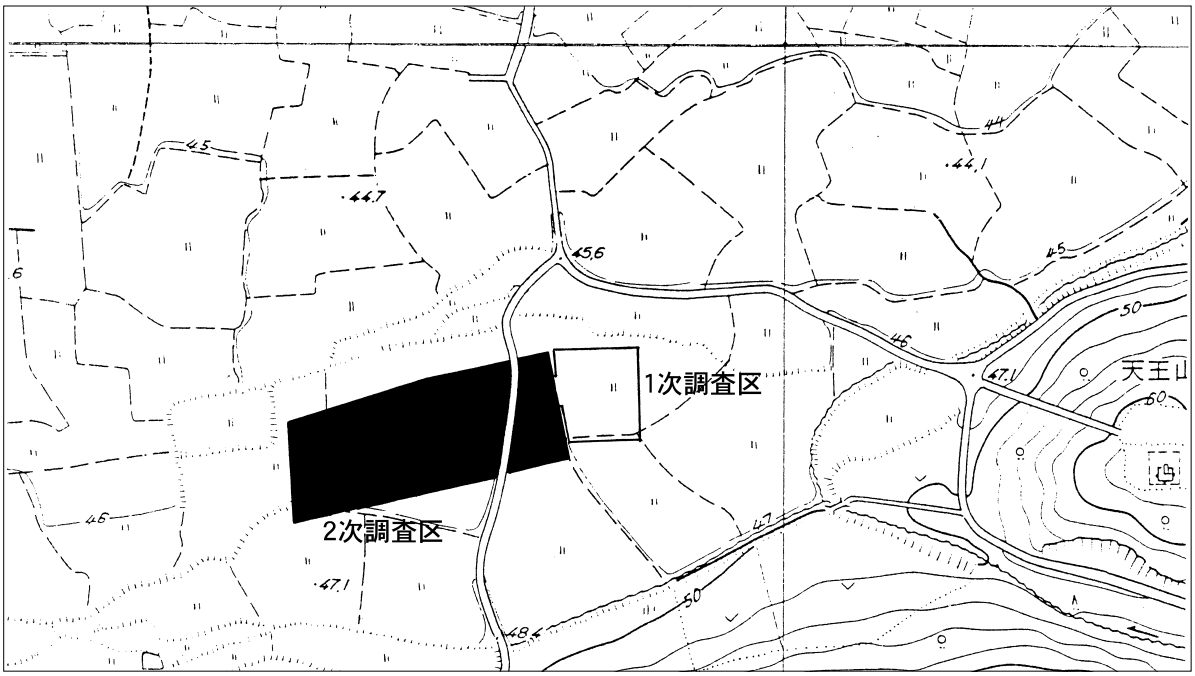


図５　天王山西遺跡（２次）調査区位置図（１：2,500）

２．調査の成果

調査の結果，検出された遺構には掘立柱建物・井戸・溝・土坑などがある。遺構の多くはB区に集中しており，Ｂ区の掘立柱建物を中心に述べることにする。

掘立柱建物 SB０２０１　Ｂ区の北東部で検出された桁行４間（８．４m），梁行３間（４．５m）の東西棟で柱間は等間である。柱掘方の平面形は一辺５０㎝ほどの隅丸方形を呈し，ほとんどの柱穴には２０㎝ほどの柱の痕跡がみられる。

写真４　ＳＢ０２０１　（西から）

掘立柱建物ＳＢ０２０２　ＳＢ０２０１の南西で検出された桁行４間（９m),梁行２間（４．８m)の南北棟で柱間は等間である。今回の調査で検出された掘立柱建物の中では最大の規模を持つ。柱の掘方の平面形も他の建物と比べると一回り大きめで，一辺７０ｃmの隅丸方形を呈す。西側柱列の北から２本目の柱穴には柱根が遺存していた。また，この柱穴のみ重複していることから，柱の部分的な差し替えが想定できる。

写真５　ＳＢ０２０２　（北から）

写真６　柱穴　（断ち割り）

掘立柱建物ＳＢ０２０３　ＳＢ０２０１から約１０m西側で検出された桁行２間（３．９m），梁行２間（３．９m）の建物である。柱中央列を三等分する位置に２つの束柱穴を持つ。

掘立柱建物ＳＢ０２０４　Ｂ区の中央北部で検出された桁行３間（５．４m）以上，梁行２間（３．６m）の南北棟で柱間は等間である。建物の北側が調査区外に延びるため全体の規模は確認できなかった。ＳＢ０２０４と重複しているが新旧関係は不明である。

掘立柱建物ＳＢ０２０５　ＳＢ０２０４と重複して検出された桁行３間（６．９m),梁行２間（４．８m）の南北棟である。柱間は桁行では２．１～２．４m，梁行では２．４mを測る。東側の柱通りは悪く，建物の平面形もやや歪んでいる。柱穴は４０～６０㎝のほぼ円形で，２０ｃm前後の柱痕跡が確認された。

掘立柱建物ＳＢ０２０６　Ｂ区のほぼ中央で検出された桁行２間（３．６m），梁行２間（３．０m)の南北棟の建物で柱間は等間である。柱の掘方の平面形は一辺５０㎝ほどの不整形な楕円形や円形を呈し，柱痕跡が残っているものもある。北側柱列中央の柱穴がＳＢ０２０５の南東隅の柱穴と重複しているが，切り合い関係は確認できなかった。

掘立柱建物ＳＢ０２０７　Ｂ区中央南部で検出された東西棟である。桁行２間（４．２m），梁行２間（３．３m）と判断した。

掘立柱建物ＳＢ０２０８　Ｂ区の南東で検出された東西棟である。桁行３間（６．７５m），梁行２間（３．６m）の柱間等間の建物である。西側中央の柱を欠くため桁行３間以上の可能性もある。建物の１．２m北側にも柱穴が平行して並ぶため，北側に庇を持つ掘立柱建物と判断した。南西隅，庇の東から２本目の柱穴には，柱に使用された木材の根本部分が遺存していた。

写真７　柱穴　（断ち割り）

掘立柱建物ＳＢ０２０９　Ｂ区のほぼ中央で検出された桁行３間（６．１m），梁行２間（３．９m)の総柱建物である。柱間は桁行では２～２．１m，梁行では１．９５mを測る。須恵器が出土した土坑ＳＫ０２１２を切って検出された。東側中央，南側

柱列の東から２番目の柱穴には柱根が遺存する。

掘立柱建物ＳＢ０２１０　Ｂ区の西側で検出された桁行３間（４．９５ｍ）以上，梁行２間（３．３ｍ）の南北棟である。南側が削平されているため，全体の規模は不明である。柱間は桁行，梁行共に１．６５ｍの等間である。土坑ＳＫ０２１１と重複しているが，切り合い関係によって土坑の方が新しいことが確認されている。

掘立柱建物ＳＢ０２１１　ＳＢ０２１０のすぐ北側で検出された建物である。東西側中央の柱が確認できなかったが，梁行を２間と想定すると桁行３間（７．２ｍ）以上，南北２間（３．９ｍ）の建物であろう。平行する２条の柱列の可能性も残っているが，今回は掘立柱建物として報告しておきたい。

掘立柱建物ＳＢ０２１２　Ｂ区南西で検出された桁行３間（６．６ｍ），梁行２間（４．５ｍ）の東西棟である。柱間は桁行で２．１～２．２５ｍ，梁行２．２５ｍを測る。

掘立柱建物ＳＢ０２１３　土坑ＳＫ０２１１を取り囲むように建てられた掘立柱建物である。一部柱穴を欠いているが，桁行４間（８．７ｍ），梁行２間（４．８ｍ）の規模である。柱間は桁行で２．１～２．４ｍ，梁行で２．４ｍを測る。土坑ＳＫ０２１１に付設されたものと考えている。

土坑ＳＫ０２１１・ＳＤ０２１１・ＳＤ０２１２

ＳＫ０２１１はほぼ長方形で，規模は東西４ｍ，南北６．３ｍ，深さ５０㎝を測る。南側から幅５０～

写真８　ＳＫ０２１１　（北から）

６０㎝，深さ３０㎝の溝ＳＤ０２１１・０２１２が２本の足のように南の調査区外へ向かって延びる。土坑と溝の切り合い関係は確認することができないため３者は一連の遺構と認識できる。これらの遺構は，検出時に出土したフイゴの羽口や，土坑埋土に混じる焼土，炭化物をあわせて考えると，工房に関連する遺構の可能性が考えられる。出土遺物には山茶碗を中心に土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，白磁，瓦器等がある。

遺物は，整理箱に３３箱である。土師器・須恵器・製塩土器・緑釉陶器・灰釉陶器・山茶碗・山皿・白磁・軽石・瓦・近世陶器などが出土している。

図示した土器はＡ区で検出された土坑ＳＫ０２５４からのものである。須恵器の杯身や壺・盤の他に土師器皿・甕・甑や須恵器甕・長頸壺・製塩土器が出土している。時期的には奈良から平安時代にかけての土坑である。

前述したようにＢ区のＳＫ０２１１からは山茶碗・山皿・鉢や白磁の碗が出土し，図示した。

Ｂ区南西のＳＫ０２２０からは須恵器の杯や蓋杯・鉢が出土した。図示した以外には，土師器甕，須恵器甕，平瓶なども出土している。奈良時代の土坑である。

写真９　円面硯

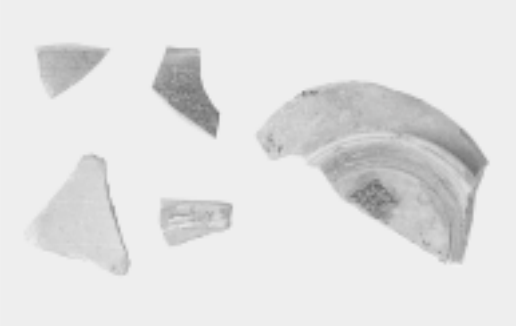


写真１０　緑釉陶器

図６　天王山西遺跡（２次）遺構平面図（１：400）

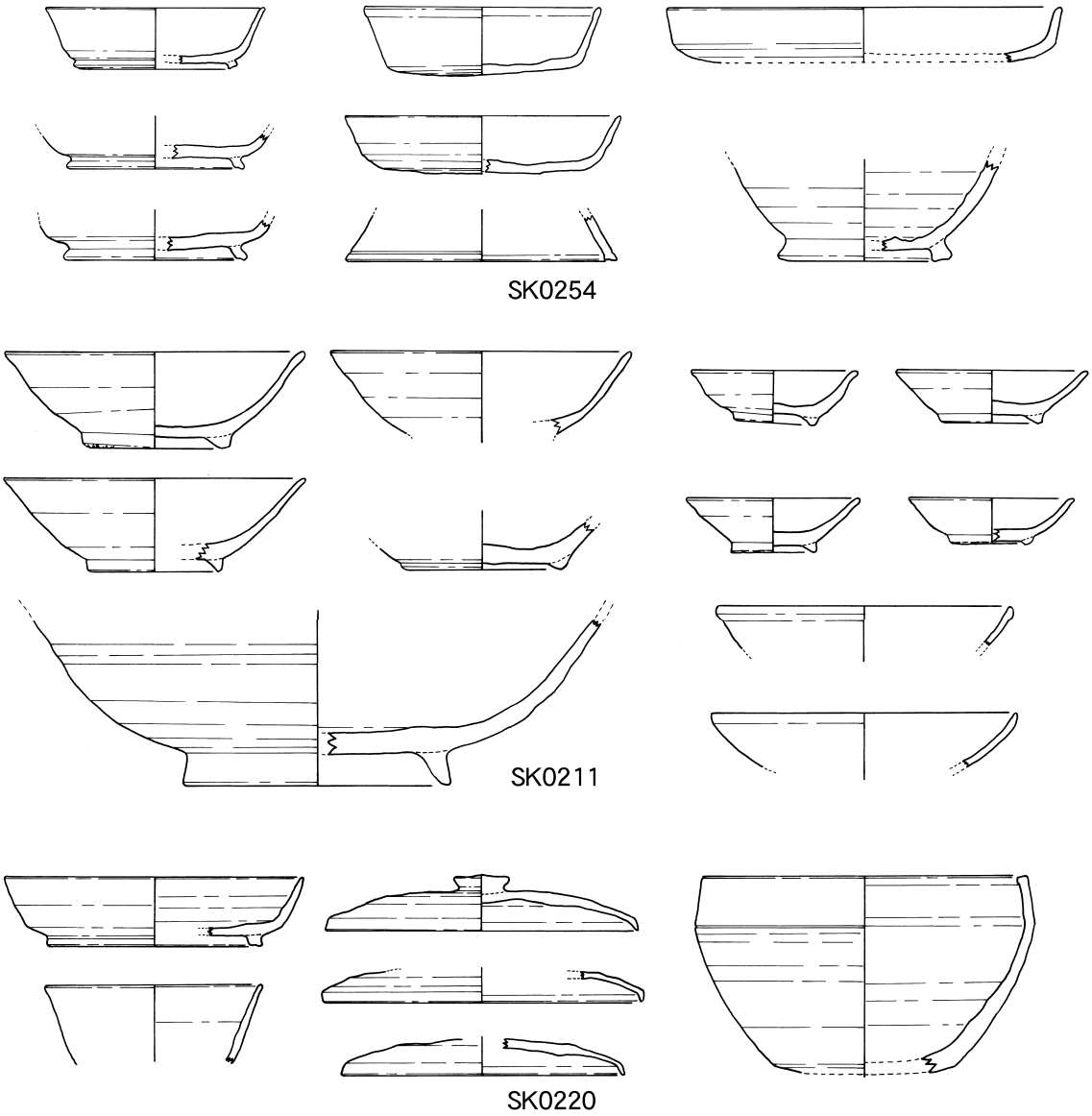


図７　出土遺物実測図（１：４）

３．おわりに

今回の調査では掘立柱建物が１３棟検出以上された。いずれの掘立柱建物の柱穴からも出土遺物はほとんどなく，正確な年代を決定することはできないが，周辺から灰釉陶器，山茶碗が出土していることから考えて平安時代中頃～鎌倉時代前半の掘立柱建物群であると判断できる。これらの建物群が当時この辺りに所在していたと考えられている伊勢国府とどのような接点を持っているのかが問題である。現段階では，伊勢国府については広瀬町の長者屋敷遺跡に存在した国府（前期）が廃絶した後，国府町に平安時代以降の国府（後期）が移転したと考えられている。今回で検出された建物群の時期や，まとまった数の緑釉陶器片の出土などから考えると，一般的な村落というより，官衙に関連する集落であったと思われる。今回の調査では残念ながら直接的には国府と関係する遺構・遺物が見つけることはできなかったが，今後もこの周辺では開発に伴う発掘調査が断続的に続くことが予想される。後期伊勢国府の所在を確認するためにはこれらの調査結果を待たねばなるまい。　【林　和範】

Ⅴ．三宅神社遺跡(5次)

１．はじめに

国府町に所在する三宅神社は式内社に比定されており，伊勢国総社の有力候補地として知られている。その三宅神社を中心に東西２００m，南北４００mの範囲が三宅神社遺跡である。

遺跡内では過去に４回の調査が実施されている。調査の結果検出された主な遺構をあげると，１次調査（平成８年５月）では奈良時代の井戸や平安時代の土坑が，２次調査（平成８年６月）では平安時代の掘立柱建物４棟が規格的に建ち並んでいるのが確認された。これらの掘立柱建物は，国府町がその地名をもとに伊勢国府推定地と考えられていることや建物の規模や規格性，出土遺物から判断して，官衙や役人の居宅など国府の一部を構成する建物群である可能性が考えられる。また，３次調査（平成８年１２月）では平安時代の柱穴群と土坑，４次調査（平成１０年５月）では，奈良時代の土坑や時期不明の掘立柱建物，他に鎌倉時代の土坑・溝が検出されている。

５次目に当たる今回の調査は三宅神社の南約２００mに約２，８００㎡の調査区を設けて実施した。調査期間は平成１１年９月９日～１２年１月５日までである。

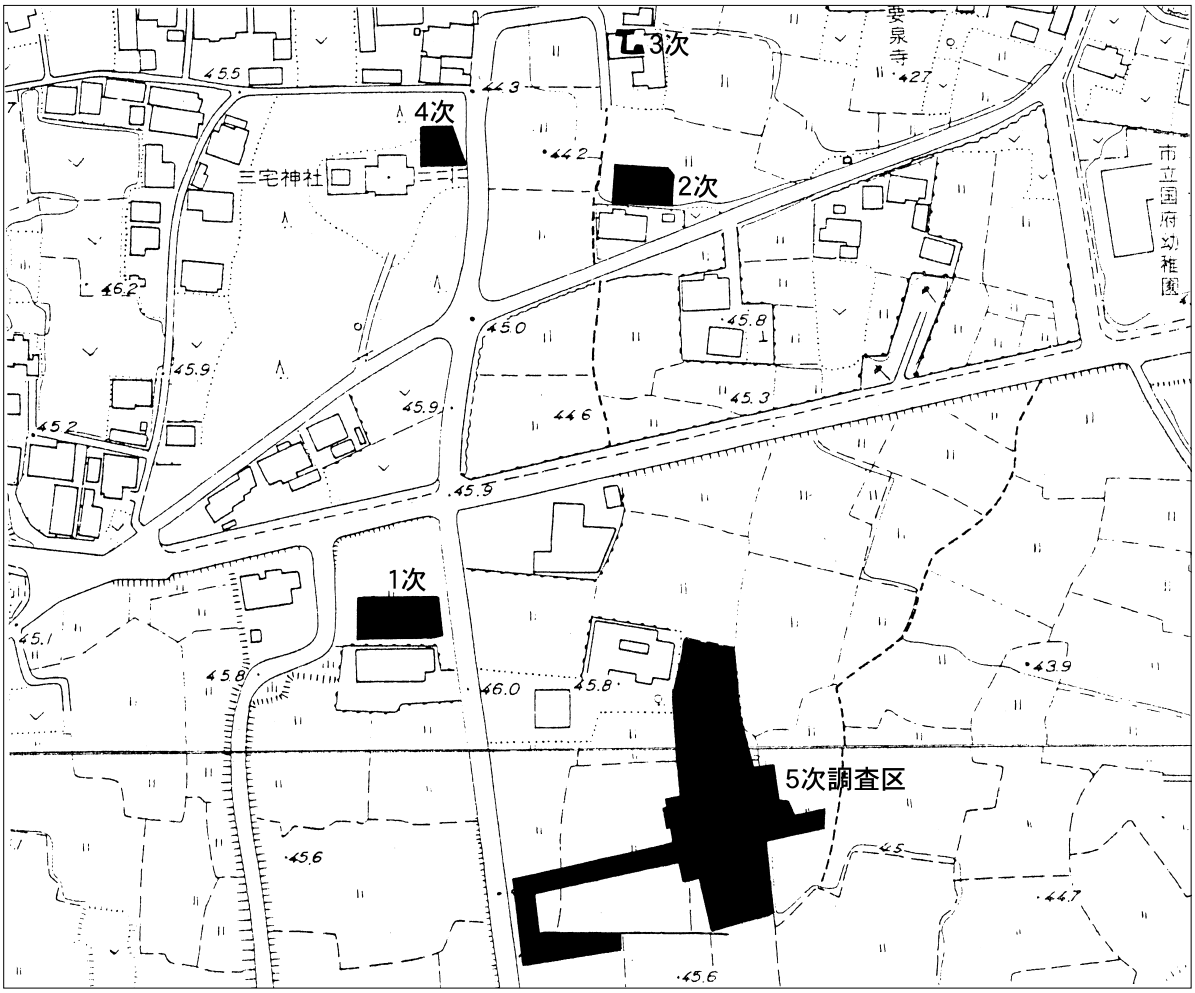


図８　三宅神社遺跡（５次）調査区位置図（１：2,500）

２．調査の成果

今回の調査で検出された主な遺構には，掘立柱建物・井戸・溝・土坑などがある。

掘立柱建物ＳＢ０５０１　調査区のほぼ中央で検出された桁行６間（１２ｍ），梁行３間（５．７ｍ）の東西に長い建物である。柱間は桁行，梁行ともに１．８～２．１ｍと一定していない。柱の掘方は今回の調査で確認された建物の中では比較的大きく，一辺が６０～１００㎝の隅丸方形ないし隅丸長方形を呈す。柱穴の平面形は，不揃いで南北に長かったり，東西に長かったり，建物の向きに対して東に振っていたりと様々である。それぞれの柱穴には３０㎝前後の柱痕跡が確認できた。

写真１１　ＳＢ０５０１　（西から）

掘立柱建物ＳＢ０５０２　ＳＢ０５０１の南西で検出された桁行５間，梁行２間の南北に長い建物である。柱の掘方は一辺６０～７０㎝の隅丸方形で大きさ・形がほぼ揃っている。柱穴が重なっており，同じ場所で若干規模を縮小して建て替えられているようである。古い方の建物の規模は桁行１２ｍ（柱間２．４ｍ），梁行４．５ｍ（柱間２．２５ｍ）である。新しい方の建物の規模は梁行は同じであるが，桁行きは１１．７ｍと若干狭くなり，柱の間隔は一定ではなくなる。

掘立柱建物ＳＢ０５０３　ＳＢ０５０２と重複して検出された東西棟である。東側中央の柱を欠くものの規模は，桁行５間（１２．９ｍ）以上，梁行２間（５．７ｍ）を測る。柱間は桁行では２．４～２．７ｍとばらつきがあり，梁行では２．７ｍの等間である。柱穴からは柱を抜き取ったと思われる痕跡が確認されている。ＳＢ０５０２との新旧関係は不明である。

掘立柱建物ＳＢ０５０４　ＳＢ０５０３と重複して検出された東西棟である。東側においては中央の柱穴しか確認できなかったが，桁行４間（９．６ｍ），梁行２間（５．１ｍ）の身舎の東面に庇が付く建物に復元できよう。柱間は桁行で２．４ｍ，梁行で２．５５ｍのそれぞれ等間，庇は２．７ｍを測る。

掘立柱建物ＳＢ０５０５　ＳＢ０５０４の南側に接して検出された建物である。桁行４間（７．５ｍ），梁行２間（４．８ｍ）の身舎の南面と東面に庇がつく東西棟である。柱間は桁行で１．８～２．１ｍ，梁行で２．４ｍの等間，庇は南面で２．４ｍ，東面で２．１ｍを測る。柱穴の一部がＳＢ０５０４の柱穴と重複しており，切り合いから本建物の方が新しいことが確認できた。

掘立柱建物ＳＢ０５０６　調査区の南で検出され

写真１２　ＳＢ０５０２　（北から）

写真１３　ＳＢ０５０６　（北から）

た南北棟である。建物の平面形はやや歪んでいて，桁行３間（６～６．３m），梁行２間（４．２m）を測る。桁行の柱間は一定ではなく，１．９５～２．２５mとばらつきが見られ，梁行では２．１mの等間となっている。

掘立柱建物ＳＢ０５０７　ＳＢ０５０３の北で検出された桁行３間（７．２m），梁行２間（４．８m）の東西棟である。柱間は桁行，梁行ともに２．４mの等間である。

掘立柱建物ＳＢ０５０８　ＳＢ０５０７の北側で検出された南北棟の総柱建物であろう。南側中央の柱を欠くが，桁行３間（６．３m）以上，梁行２間（４．２m），柱間は桁行き，梁行ともに２．１mを測る。

掘立柱建物ＳＢ０５０９　建物を構成するいくつかの柱穴を欠くため不確定要素が強いが，桁行５間（１０．２m），梁行３間（６m）の南北棟が想定される。

掘立柱建物ＳＢ０５１０　調査区の南で検出された桁行４間（９．３～９．６m），梁行２間（３．９m）の総柱建物である。柱間は桁行き，梁行ともに１．９５～２．４mの間で一定していない。

今回の調査で計７基の井戸が検出されたが，そのうち３基に井戸を構築していた木材が遺存しているのが確認された。

井戸ＳＥ０５０３　一辺約３．５mの隅丸方形の掘方を持ち，深さ約４mを測る。宇野隆夫氏の分類でいうＢⅢ類縦板組横桟どめ井戸である。掘方底部に長さ約９０ｃmの角材を用い方形に組んだ横桟を２段重ねて設置した後，幅２０～２７ｃmの縦板（側板）を立て並べ，横桟で支える構造を持つ。側板は上下２段に積み重ねられており，下段側板の合わせ目には幅の狭い板が添えられているのが確認できた。底部の横桟内から，曲物，山茶碗，土師器，ロクロ土師器がまとまって出土している。

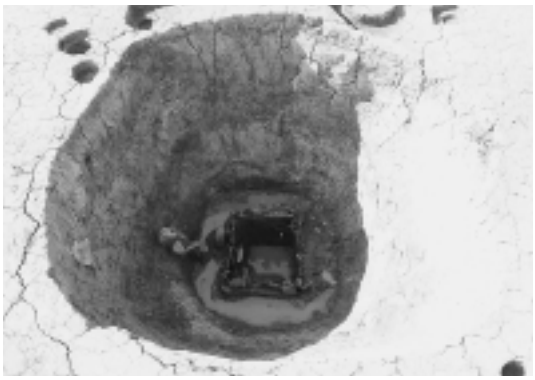


写真１４　ＳＥ０５０３　（西から）

写真１５　ＳＥ０５０３　（底部横桟）

写真１６　ＳＥ０５０３出土土器

写真１７　ＳＥ０５０３出土曲物

井戸ＳＥ０５０５　ＳＢ０５０６とＳＢ０５１０の間で検出された井戸である。掘方は径６ｍの不整円形を呈し，今回の調査で確認された７基の井戸の中で最大の規模を持つ。井戸内部の構造はＳＢ０５０３と同型式であるが，底部に組まれた桟とその上の桟の間には四隅に束柱がはめ込まれ，補強がなされていたと思われる。また，最下段には径約５０ｃｍの曲げ物が設置されていた。２段に積み重ねられた側板のうち，下段の側板は２枚重ねて立てられていた。上段側板の下端部は矢板状に加工され，周囲を土で充填された下段側板の外側に打ち込まれているのが確認された。

写真１８　ＳＥ０５０５　（東から）

井戸ＳＥ０５０６　掘方の平面形が２．２～２．４ｍの不整隅丸方形ないし不整円形を呈し深さ約２．４ｍを測る。宇野分類によれば，ＢⅣ類縦板組隅柱横桟どめ井戸にあたる。四隅に角材を立て柱とし、幅１５～２０ｃｍの縦板(側板)を５～６枚並べ約１．２ｍの方形に組み，柱にあけたほぞ穴に横桟を通して支え，井壁を保護する構造を持つ。

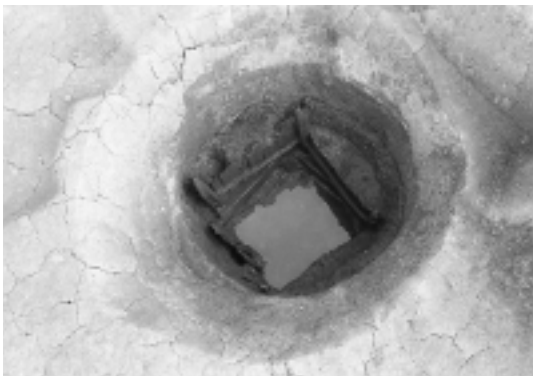


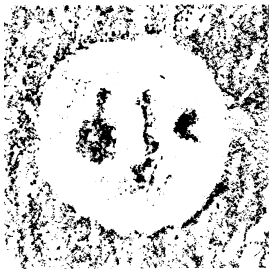
写真１９　ＳＥ０５０６　（上から）

側板内部からは土師器，須恵器片が得られたほか，底部から横櫛，４隅の柱周辺から斎串が出土した。

掘方内の埋土からは「小」の文字が押印された瓦（長者屋敷遺跡採集瓦と同印）を含む多数の瓦片，「四」の墨書のあるほぼ完形の須恵器坏身，底部から斎串が一点出土している。

参考文献

宇野隆夫1989「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社



ＳＥ０５０６出土　　**長者屋敷遺跡出土**

図９　文字押印瓦拓影（１：１）

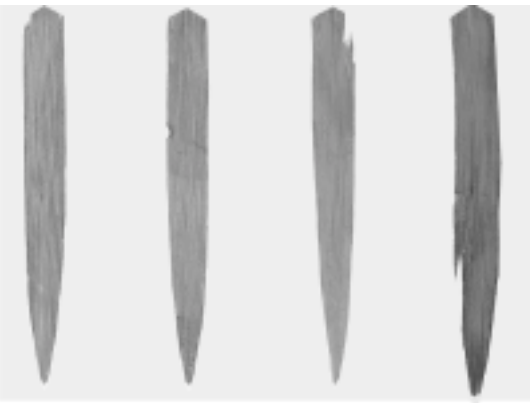


写真２０　ＳＥ０５０６出土斎串

写真２１　ＳＥ０５０６出土横櫛

写真22　出土遺物　（土師器・須恵器・灰釉陶器）

写真23　出土遺物　（墨書須恵器）

図10　三宅神社遺跡（５次）遺構平面図（１：400）

３．おわりに

今回の調査では１０棟以上の掘立柱建物が検出され，それらは奈良時代後半～鎌倉時代前半にかけて断続的に営まれたものと推定される。確認された建物ＳＢ０５０３・０５０４・０５０５の３棟が重複していることから判断して，建物群は少なくとも３時期に分けることができる。建物群の中には，官衙のように整然と規則的に配列された建物配置は採られていないものの，「コ」の字型に計画的に配置されたと考えられる一群がみられる。

これらの建物は，律令的祭祀に関わる斎串，それに伴って見つかることの多い横櫛，そして円面硯，朱墨の付着した転用硯，緑釉陶器，墨書のある灰釉陶器などの出土を考えあわせると，一般層以上の人々の居宅であった可能性が高いと思われる。

現在までの調査で奈良時代中期～平安時代初頭の前期伊勢国府が広瀬町に所在する長者屋敷遺跡であることは判明している。その後の後期伊勢国府は国府町に移転したと考えられているが，その所在は判明していない。今回の調査で出土した長者屋敷遺跡と同印の文字瓦は，今まで歴史地理学的研究の成果によってのみ想定されてきた後期伊勢国府の推定地と，前期伊勢国府である長者屋敷遺跡とを実際に関連づけ，国府移転を考える上で重要な遺物であると評価できる。

今回検出した遺構には官衙的要素は稀薄であるが，文字関連遺物の出土，律令祭祀を取り入れている点などから考えると，後期国府の所在が判明していない現在，官衙関連遺跡として捉えておくのが妥当であるといえよう。

【林　和範】

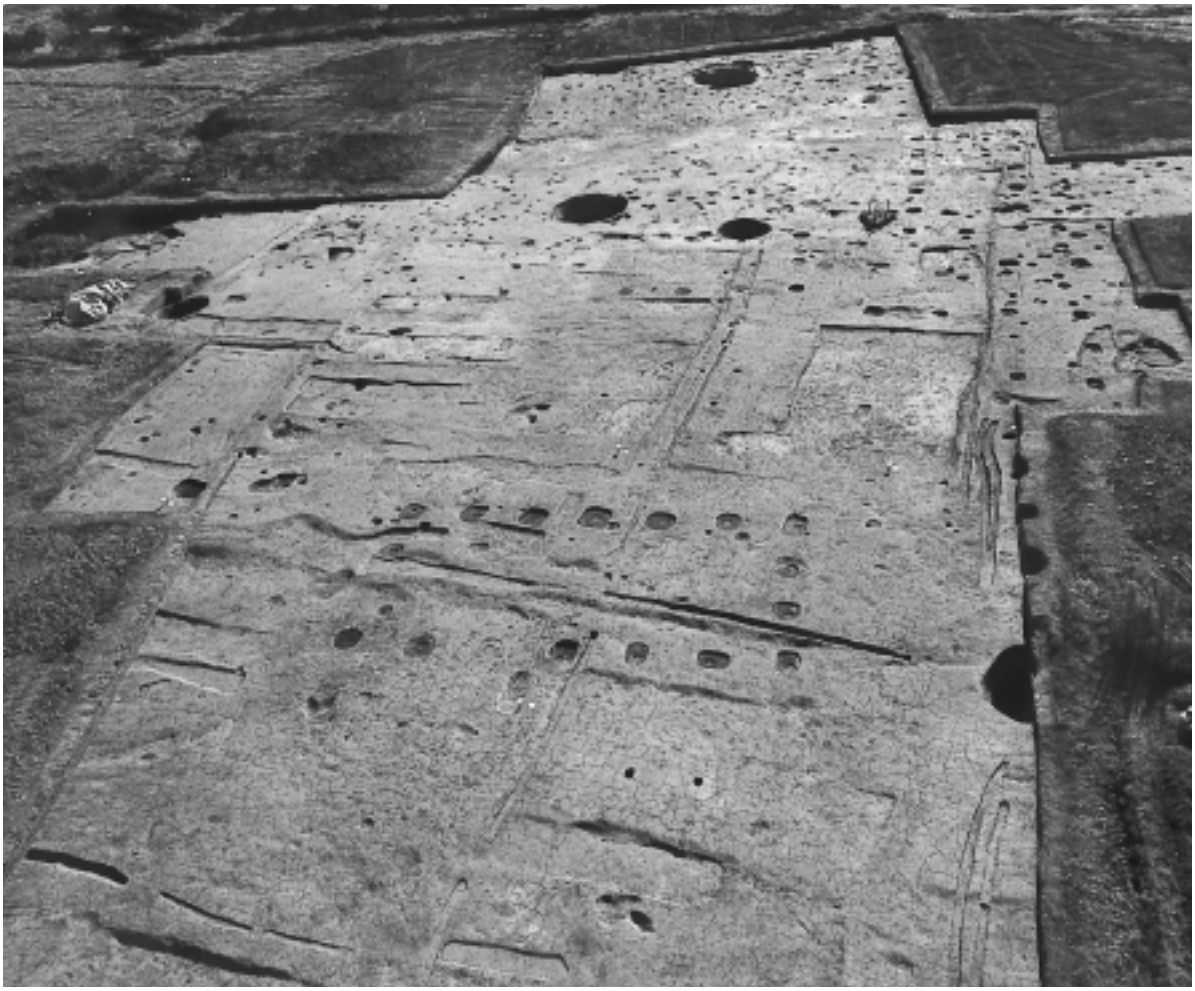


写真24　調査区中央部　（北から）

Ⅵ．梅田遺跡

１．はじめに

梅田遺跡は鈴鹿川中流の舌状に延びた低位段丘上に位置する。本遺跡は故・藤岡謙二郎氏が想定した方八町の国府域からやや東に離れた場所に位置する。

周辺で実施された過去の発掘調査としては，本遺跡の西側に所在する梅田古墳の調査が平成２年に行われている。調査の結果，本古墳は径１０．５mの規模を持つ円墳で，円筒埴輪や須恵器などが出土している。

今回の梅田遺跡の調査も古墳時代の遺構・遺物の出土が期待された。

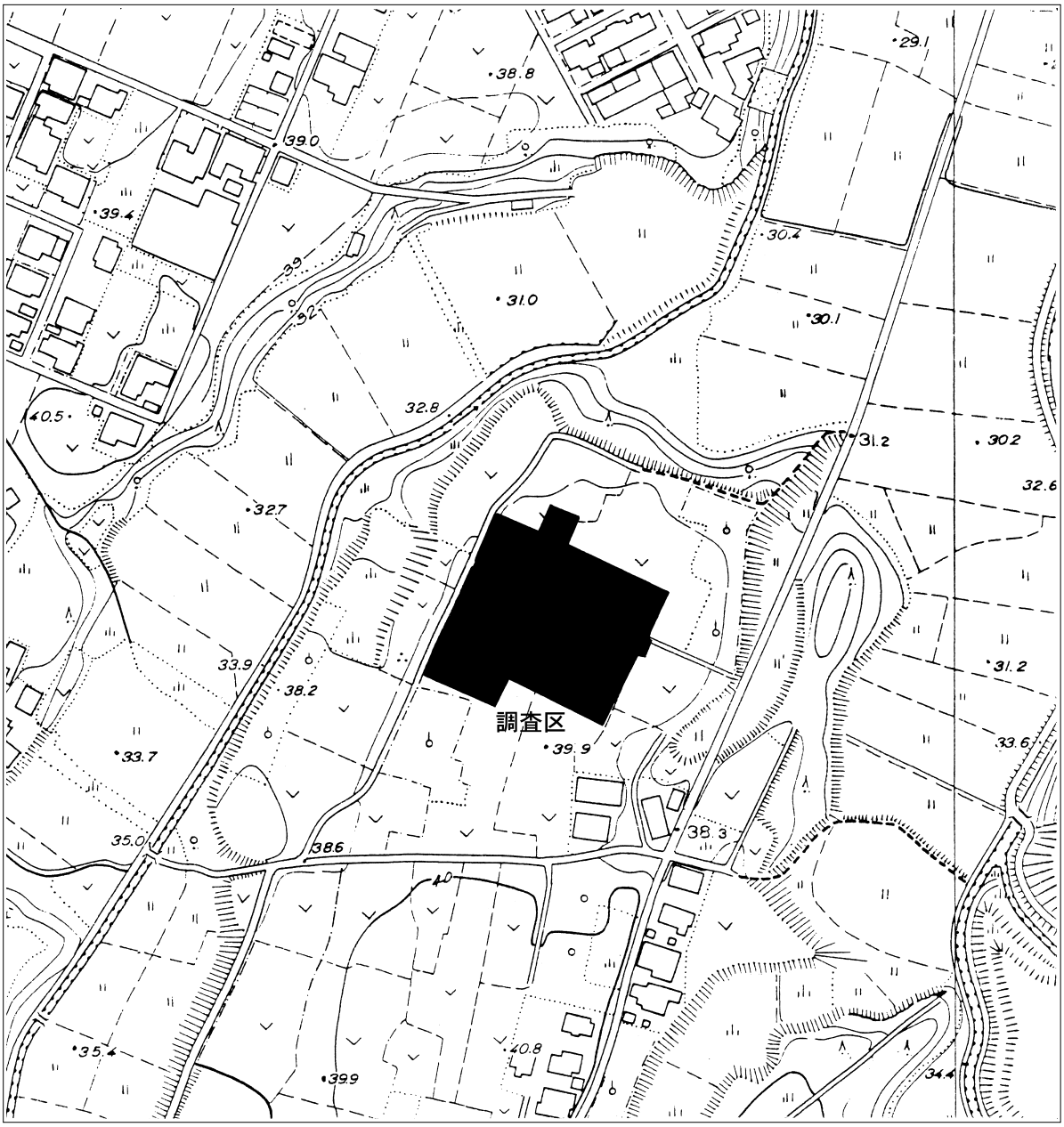


図11　梅田遺跡調査区位置図（１：2,500）

２．調査の成果

今回の調査では奈良時代末～平安時代初期（８世紀末～９世紀前半）の集落跡と鎌倉時代（１２～１３世紀）の集落跡がはっきり二分した形で確認された。調査区の東側には奈良時代末～平安時代の建物跡が，西側には鎌倉時代の建物跡が並んでおり，時期的にはほとんど重複していない。

古代（奈良時代末～平安時代初期）

建物跡として掘立柱建物が１２棟，竪穴住居が４棟検出された。以下掘立柱建物，竪穴住居，土坑，の順で遺構の説明をする。なお遺構番号は不規則に並んでいるため，遺構ごとにそれぞれ北から順に説明を述べていく。

写真２５　調査区東側　（北から）

掘立柱建物ＳＢ０４　調査区の北部中央で検出された桁行３間（約３．９m），梁行２間（約３．６m）の東西棟である。

掘立柱建物ＳＢ０８　ＳＢ０４の東側で検出された桁行４間（約８．０m），梁行２間（約５．０m）の東西棟である。

掘立柱建物ＳＢ２４　ＳＢ０８と重複する桁行４間（約８．４m），梁行２間（約５．０m）の東西棟。ＳＢ０８との新旧関係は不明である。

掘立柱建物ＳＢ２７　ＳＢ２５の東側に位置する桁行３間（約５．０m），梁行２間（約４．６m）の東西棟。本建物の南側柱列はＳＢ２５の南側柱列と揃っている。

掘立柱建物ＳＢ０５　桁行４間（約９．２m），梁行２間（約４．６m）の身舎の東側に庇がつく構造の南北棟。広さは約７４㎡（約２２坪）ある。また，この建物の南側柱列に並行して３基のピットが並んでおり，この面にも庇がついていた可能性がある。本建物は規模を縮小して建て替えた跡が見られる。本建物の西側柱列はＳＢ０４の東側柱列と柱筋が揃っている。

掘立柱建物ＳＢ１３　桁行５間（約１０．５m），梁行２間（約４．８m）の南北棟。面積約５０㎡。掘立柱建物ＳＢ０７と重複している。切り合い関係から，ＳＢ０７よりも本建物の方が古いことが分かった。

掘立柱建物ＳＢ０７　桁行５間（約１０．５m），梁行２間（約４．８m）の身舎の南側に庇がつく構造の東西棟。庇部分を含めた広さは約７９㎡。１２棟中で最大の規模を持つ。ＳＢ０６・１３と重複している。

写真２６　ＳＢ０７　（西から）

掘立柱建物ＳＢ０６　桁行３間（約５．４m），梁行２間（約３．６m）の東西棟。本建物はＳＢ０７と重複しているが，新旧関係は不明である。

掘立柱建物ＳＢ１２　ＳＢ０６の西側で検出された桁行３間（約４．０m），梁行２間（約３．８m）の建物。柱穴の一部を欠いている。

掘立柱建物ＳＢ２８　ＳＢ１２の南側に位置する建物。鎌倉時代の溝ＳＤ０１・０２に切られており，南半分の柱穴が欠けている。梁行２間で桁行は２間以上の南北棟。ＳＢ１８と重複している。

掘立柱建物ＳＢ１８　調査区の南部中央に位置する建物。溝ＳＤ０１・０２に切られているため柱穴の一部が欠いているが，おそらく桁行４間(約６．５

m，梁行２間（約４．８m）の南北棟になるものと思われる。

竪穴住居ＳＨ０３　ＳＢ０５の東側で検出された，３．６m×３．０mのやや東西に長い隅丸長方形の竪穴住居。北側に竈を伴う。

竪穴住居ＳＨ０４　ＳＢ０３と重複して検出された竪穴住居。南北５．４m×東西３．９mの隅丸長方形の平面形を呈する。切り合いから，ＳＨ０３よりも古いことが判明した。

写真２７　ＳＨ０３・０４　（北から）

竪穴住居ＳＨ０１　調査区の東隅で検出された隅丸方形の竪穴住居。規模は約４m四方。調査区外に延びるため，一部拡張を行ったところ，東側で竈を検出した。

写真２８　ＳＨ０１　（東から）

竪穴住居ＳＨ０２　ＳＢ０７の東側で検出された３．６m×２．８mの南北に長軸をとる隅丸長方形の竪穴住居。北側に竈を伴う。

土坑ＳＫ４１　調査区北東近くに位置している隅丸方形の土坑。規模は約４．５m四方。掘立柱建物ＳＢ２５・２７と重複している。掘立柱建物の柱穴の方が新しく掘られているため，本土坑は両掘立柱建物よりも古いことが分かった。なお，本土坑からは平瓦も多く出土している。竈状のものは確認できなかったが竪穴住居であった可能性もあることも指摘しておきたい。

土坑ＳＫ２６・３１・３２・３３　掘立柱建物ＳＢ０７・１３と重複して検出された土坑群。全て掘立柱建物の柱穴に切られており，本土坑群は掘立柱建物よりも古い。なお，これら４基の土坑群は重複して検出されたが，切り合い関係はよくわからなかった。須恵器・土師器・平瓦などの遺物が多数出土した。

写真２９　ＳＫ２６（東から）

土坑ＳＫ２７　調査区南側中央に位置する６．３m×５．８mの東西に長い隅丸方形の土坑。掘立柱建物ＳＢ２８柱穴と溝ＳＤ１４に切られている。土師器の坏・高坏脚・甕や須恵器の坏，平瓦など遺物が多数出土した。「中」の文字が押印された瓦も本土坑から出土した。

土坑ＳＫ２９　調査区南側，ＳＨ０２のすぐ南側に位置する，５．６m×４．７mの土坑。土師器・須恵器・平瓦が多数出土した。

ＳＢ０７とＳＢ１２とＳＢ２８は柱列の方位を同じくしており，同時期の建物であったと思われる。また，ＳＢ０４・ＳＢ０８・ＳＢ０５・ＳＢ１３は柱列の方位が同じであるだけでなく，柱筋までも揃っており，非常に企画性を持って建物を配置していたことが窺える。なお，ＳＢ０５は規模を縮小して建て替えた跡が見られる。これらのことから判断し

て，奈良末～平安初期の間で少なくとも２時期の変遷が集落内にあったと考えられる。ＳＢ０８とＳＢ２４とＳＢ２５は互いに重複しているため，あるいは３時期以上の変遷があったかもしれない。

写真30　出土遺物　（土師器）

写真31　出土遺物　（須恵器）

中世（鎌倉時代）

掘立柱建物が１１棟確認されている。以下，掘立柱建物，溝，土坑の順で説明をする。掘立柱建物は複雑に重複しているため，主な建物跡だけを取り上げて概述する。（ただし，遺構配置図には検出された全ての建物跡を掲載した）。なお，古代の項と同様，北側の遺構から順番に説明していく。

掘立柱建物ＳＢ１１　調査区北側に位置する桁行６間（約１２．８m），梁行３間（約５．７m）の総柱建物であると考えられる。本建物のすぐ東隣に位置する土坑ＳＫ１７の周囲まで柱穴列が延びているようにも見えるのでそこまで建物の柱が並んでいた可能性がある。もしそうだとすると，ＳＫ１７は本建物の東に付属していたと考えられ，およそ１７m×６mの東西に長い建物であったことになる。

土坑ＳＫ１７　ＳＢ１１に伴うと考えられるもの。本土坑から溝ＳＤ１４が南に向かって延びている。山茶碗・山皿が多く出土したほか青磁・常滑焼甕なども多く出土した。

溝ＳＤ１４　ＳＫ１７から始まり，溝ＳＤ０１に向かって流れていたと思われる溝。幅は広いところで約７０cm，深さ約５０cmほどである。本溝は土坑ＳＫ１９を避けるように，まずＳＫ１７から東に延び，南向きに方位を転じてＳＤ０１に注いでいる。

掘立柱建物ＳＢ１０　ＳＢ０９などと重複して検出された桁行６間(約１２．８m),梁行３間（約６．３m）の総柱建物。南面の柱列は西の３つの柱穴がやや北にずらして並べられている。これはすぐ南にＳＢ０３があり，それを避けるようにして本建物を建てようとしたことが読み取れる。つまりＳＢ１０はＳＢ０３より後に建てられたことが分かる。

掘立柱建物ＳＢ０９　ＳＢ０３・１０などと重複して検出された総柱建物。桁行５間（約１０．５m），梁行５間（約１０．５m）に，東に張り出し部（３間×１間）を持つ構造である。面積は約１１８㎡（約３６坪）と，本遺跡鎌倉時代の建物の中で最大の規模を持つ。

掘立柱建物ＳＢ０３　ＳＢ０１の北に位置する総柱建物。５間（約１０．５m），４間（約８．４m)に，西側に張り出し部（４間×１間）を持つ構造である。面積は約１０６㎡（約３２坪）。南東隅に土坑（ＳＫ０４）が伴っている。本建物の南側柱列はどういうわけか２列並んでいる。

土坑ＳＫ０４　ＳＢ０３に伴うもの。遺物量はきわめて少ない。山茶碗などが出土した。

掘立柱建物ＳＢ２０　ＳＢ０３と重複する3間（約６．５m），２間（約４．３m）の総柱建物である。

掘立柱建物ＳＢ０１　調査区の西側で検出された４間（約８．６m），３間（約７．５m）の総柱建物である。本建物の東側に南北に長い楕円形の土坑（ＳＫ０３）が付属している。また，北東隅の柱穴から青磁皿が出土した。北東は鬼門にあたるため，魔除けの意味をこめて意図的に埋納されたものと推定される。

土坑ＳＫ０３　ＳＢ０１に伴うもの。遺物量は少ないが，山茶碗や土師器皿などが出土した。

掘立柱建物ＳＢ０２　ＳＢ０１と重複して検出された３間（約６．４m），２間以上の総柱建物である。西側の調査区外の延びることが予想されるため，全容は不明である。なお，ＳＢ０１との新旧関係は不明であるが，本建物の柱穴の方が大きいため，本建物の方が古いことが予想される。

溝ＳＤ０１　調査区南側を流れる鎌倉時代の幅約１４０cm，深さ約１００cmの溝である。鎌倉時代の掘立柱建物とほぼ方位を同じくしていることから，この溝は集落の南側を流れる堀または区画溝の役割をしていたと考えられる。

写真３２　ＳＤ０１　（西から）

土坑ＳＫ０１　調査区南西部に位置する土坑。溝ＳＤ０１を切っており，溝よりも新しいものであることが分かった。本土坑からは土師器の羽釜（１５世紀）が多く出土した。

土坑ＳＫ１０　調査区北側に位置する平面長方形の土坑。規模は２．４ｍ×１．５ｍと南北に長い。遺物は山皿や土師器皿（かわらけ）などの皿類の出土が多い。また青磁碗・皿の出土量も多い。中世墓の可能性があるということを指摘しておきたい。

写真３３　ＳＫ１０土器出土状況　（西から）

土坑ＳＫ１９　ＳＫ１７のすぐ南側に位置する土坑。約６ｍ四方の隅丸方形を呈する。山茶碗・山皿，土師器皿が非常に多く出土した。また，青磁の四耳壺や青白磁の合子など，青磁・白磁類が多く出土した。鉄製品もわずかだが出土した。

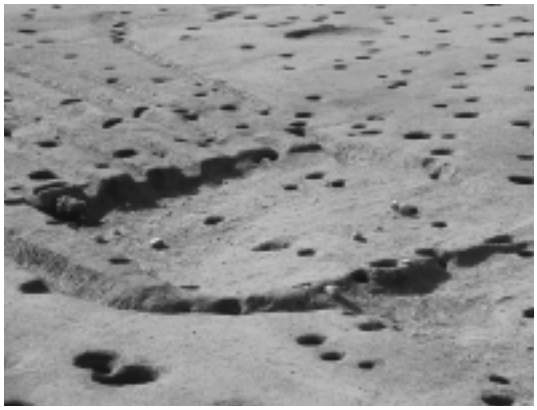


写真３４　ＳＫ１９　（北東から）

遺物は山茶碗・山皿・片口鉢・常滑焼甕・土師器（鍋・かわらけ）などが特に多く出土した。山茶碗の中には墨書で「上」「呈（？）」などの文字が書かれたものや，モミジの絵が描かれたものなどがある。その他には青磁や白磁など中国からの高級輸入品が多いことがこの遺跡の特徴としてあげられる。特に青磁の四耳壺が数点出土したことは本遺跡の集落で生活していた人々の性格を考える上で注目される遺物である。

写真３５　調査区西側　（北東から）

写真３６　出土遺物　（墨書山茶碗）

３．おわりに

現在，伊勢国府については平安時代初め頃（９世紀前半），それまで広瀬町にあった前期国府（長者屋敷遺跡）が何らかの理由で廃絶し，国府町の地に移転してきた（後期国府）と考えられている。その時期は本遺跡に集落が営まれ始める時期とほぼ合致する。今回の調査で明らかになった企画的に配置された建物や，同一場所での建て替えが認められる建物の存在，また瓦（文字瓦を含む）の出土などから判断すると，本遺跡は一般の集落遺跡とは考えにくい。ある程度の財力や権力を持った人々の集落跡と考えられる。想像をたくましくすれば，それはつまり国府に関連する人達の住まいではないだろうか。現時

点では確たる証拠が認められないため，判断は今後の調査に譲るが，これからの周辺の調査の蓄積によりこれらの集落の性格が明確になることが期待される。

また，当遺跡では１０～１１世紀に該当する遺構や遺物はほとんど見つかっていないことから，この時期当地では人々の生活の痕跡は認められない。

再び集落が築かれ始めたのは鎌倉時代（１２～１３世紀）の頃である。検出された掘立柱建物は，当時としては非常に大きな規模を持つ建物で，しかも高級品である青磁や白磁などが出土している。これら中国からの輸入品を手に入れることができる人達が生活していたということからかなりの有力者集団の集落であったと考えられる。　【石田　浩司】

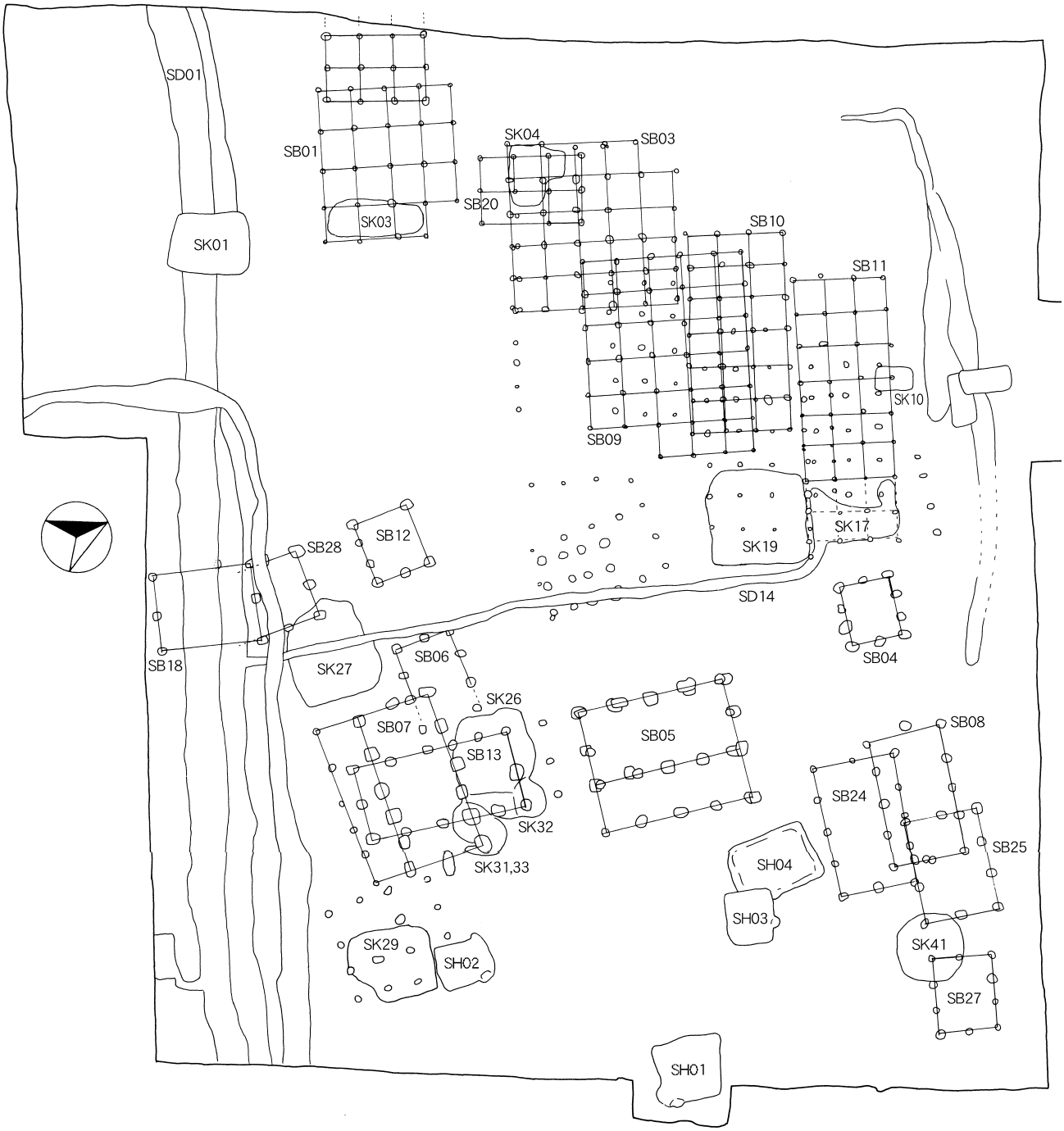


図12　梅田遺跡遺構平面図（１：400）

写真37　出土遺物　（土師器・山茶碗）

写真38　出土遺物　（青磁・白磁・青白磁）

報　告　書　抄　録

ふりがな	てんのうやまにしいせき　みやけじんじゃいせき　うめだいせき
書　　名	天王山西遺跡　　三宅神社遺跡　　梅田遺跡
編著者名	岡田　雅幸・中森　成行・林　　和範・石田　浩司
編集機関	鈴鹿市考古博物館
所　在　地	〒513－0013　三重県鈴鹿市国分町224番地　TEL0593（74）1994
発行年月日	2001年３月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天王山西（１次）	国府町字中木曽田	24207	955	38°50′56″	136°30′49″	19990118～19990226	824㎡	ほ場整備
天王山西（２次）	国府町字中木曽田	24207	955	38°50′56″	136°30′47″	19990506～19990831	3,000㎡	ほ場整備
三宅神社（５次）	国府町字中木曽田	24207	495	38°50′58″	136°30′41″	19990909～19990105	2,800㎡	ほ場整備
梅　田	国府町字梅田	24207	1244	38°51′19″	136°31′04″	20000417～20010119	4,270㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
天王山西（１次）	散布地	平安～鎌倉	掘立柱建物・溝土坑・井戸	土師器・須恵器・瓦・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・山皿	平安時代の集落遺跡
天王山西（２次）	散布地	奈良～鎌倉	掘立柱建物・溝土坑・井戸	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・山皿	平安時代の集落遺跡
三宅神社（５次）	散布地	奈良～鎌倉	掘立柱建物・溝土坑・井戸	土師器・須恵器・斎串・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・山皿・瓦	井戸から文字瓦・斎串が出土
梅　田	散布地	奈良～鎌倉	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・井戸	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・山皿・青磁・白磁・瓦器・瓦	「上」「呈（？）」の墨書や紅葉の描かれた山茶碗が出土

埋蔵文化財発掘調査概報
基盤整備促進事業(担い手育成型)国府南部地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査
天王山西遺跡
三宅神社遺跡
梅　田　遺　跡

編集　鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市考古博物館
〒513－0013　鈴鹿市国分町224
TEL0593－74－1994
2001年３月31日

印刷　早川印刷株式会社
鈴鹿市算所３－16－30
TEL　0593－78－6616